

「新学術領域研究（研究領域提案型）」の見直しの方向性について

平成30年7月20日
科研費改革に関する作業部会

科学技術・学術審議会 学術分科会 研究費部会（以下、「研究費部会」という。）は、「科研費による挑戦的な研究に対する支援強化について（平成28年12月20日）」において、「新学術領域研究（研究領域提案型）」を、学術の昨今の動向に即して一層挑戦的な研究への支援を強化するため見直した「学術変革研究」種目群として位置付け、その在り方を検討すべきと提言した。

研究費部会は科研費改革に関する作業部会（以下、「作業部会」という。）を設置し、作業部会において検討を行うことを要請した。これを受けて作業部会は、「領域型研究」への支援について、基盤研究等、他の研究種目では代替・補償しがたいものを明確にし、そもそも「領域型研究」による支援が必要か否かを原点に立ち返って検討を行い、「新学術領域研究（研究領域提案型）」のこれまでの成果と、現状の課題や問題意識を以下のとおり整理した。

〈これまでの成果〉

- 研究領域を通じた異分野の研究者との議論により新たなアイデアが創出された。
- 新たな課題・テーマに対し、分野を超えて体系的に取り組む体制が構築できた。
- 個人の研究費では対応できない新技術への対応、大型設備の整備が進んだ。
- 研究領域に若手研究者を参画させることにより研究分野の活性化、人材育成が図られた。
- バーチャルな研究体制により必要な人材の参画を広く得られやすかった。

〈課題・問題意識〉

- 現在の「新学術領域研究」という種目名や、公募要領に「対象」として記載のある「新興・融合領域の創成」等のキーワードが、応募者にとって強引な融合研究を検討させ、過度に新規性を意識させているのではないか。
- 現在の「新学術領域研究（研究領域提案型）」は、研究領域の構成や研究期間の設定に柔軟性がないために、研究領域の応募段階における計画作成や採択後の研究領域の運営等において、領域代表者、各研究課題応募者にとって大きな負担となっているのではないか。
- 現在の「新学術領域研究（研究領域提案型）」は、研究領域の構成が厳格に決まっているために、研究の特性に応じた柔軟で機動的な対応が困難となっているのではないか。

作業部会では、上記成果が認められることから、引き続き、「領域型研究」への支援が必要であるとの結論に至った。一方で、上記課題・問題意識が見られることから、今後の「新学術領域研究（研究領域提案型）」に関し、①目的を見直す、②学術研究領域の構成を見直す、③支援規模を見直す、の3点について審議を行い、別紙のとおり見直しの方向性を取りまとめた。

(別紙)

「新学術領域研究（研究領域提案型）」の見直しの方向性（案）

- ① 「学術の体系や方向の変革・転換を先導する」学術研究領域で、「学問分野に新たな変革や転換をもたらすもの、学問分野において強い先端的な部分の発展をもたらすもの」を対象とするように目的を見直すとともに、現在の研究種目名を変更する。
- ② 研究領域の特性等に応じて、「総括班」、「計画研究」及び「公募研究」の構成を柔軟に設定できることとする。
- ③ 研究領域の規模に応じた適切な審査が可能となるように応募総額に応じた区分を設ける。その際、挑戦性・緊急性の高い学術研究上の課題への短期的・集中的な取組が可能となるように、領域運営の機動性に配慮し、小規模で実施する区分を設ける。また、評価結果を踏まえて発展させる仕組みを検討する。